

部報

雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 5 1
ページ	3 5 - 4 8
発行年	1913-06-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/6247

部 報

水泳部廣告

來らずや

來りて海を抱かずや、

藍紺の海潮は南國の香を送り、綠青の松林は銀砂の上に紫色の影を作る、羽毛の如く白く散る波頭、と夢の如き帆船とを綴る小島の群は幾多の傳説を包み、封建時代の秘密を埋めたる城趾は廢墟の哀愁を醸すところ、唐津の地は如何に若き憧憬を起さしむる事よ、

「彼は文字を知らずまた水泳をも知らず」と希臘の人は云へり天涯萬里の故郷に慈愛深き父母兄弟を訪はんとする友よ、白雲を分け千山萬岳を踏破せんとする友よ、靜かに讀書せんとする友よ、陰鬱なる山間に温泉浴せんとする友よ、潮風の爲め松蔭の爲め怒濤の爲め銀砂の爲め傳説の爲め日光浴と海水の爲めに和氣靄然たる自炊團に來りて休暇七旬の中三旬をさき鐵腕鐵脚を鍛鍊せよ、

龍南會水泳部

綱 領

- 一、部員ハ凡テ風紀ヲ嚴肅ニ保ツベシ。
- 二、水泳道ヲ研ク事ヲ忘ルベカラズ。
- 三、本部ヲシテ秩序アラシメ凡テ一致共同ヲ旨トスベシ。

規 則

第一章 事 務

- 一、龍南會水泳部將來ノ爲メ各自十分責任ヲ重ンズベシ。
- 二、本部事務ハ水泳部長之ヲスベ水泳部委員其ノ命ヲ受ケ之ヲ行フ
- 三、水泳師範ニ對シテハ盡ク其命ニ服從スベシ。

第二章 等級及進級

- 一、技ノ長短及勤怠ノ加何ニヨリ各等級ヲ定ム。
- 二、等級ヲ左ノ六等ニ分チ數目ヲ列舉ス。
- 級外 敲足、押手、手泳(兩輪伸)略体、
- 五級 一重伸略体、二重伸略体、平泳(兩輪伸)正体、浮身、手跳、直跳
- 四級 一重伸、二重伸、片拔手一重伸、水府流太拔手略体、小堀流早拔手、立休(小堀流踏水術) 水中平泳(兩輪伸) 順下、逆下。
- 三級 片拔手二重伸、三段伸、諸手伸、水府流太拔手、神傳流太拔手、小拔手略体、諸拔手、平体片拔手、觀海流蛙足游、水底蹴伸、水中翼伸。

- 二級 繼手伸、拔手伸、諸拔手直伸、小拔手、立休(踏水術)諸應用、水中一重伸、水中平伸、逆下、式トービ。
- 一級 片手拔、片拔手、救助法、波濤、水泳術研究。

- 三、進級各級ノモノニシテ規定ノ數目ヲ修了シ左記ノ距離ヲ游泳セシモノヲ進級セシム。

- 級外 水上三十間以上。 水中一間以上。
- 五級 水上三町以上。 水中三間以上。
- 四級 水上一哩以上。 水中六間以上。
- 三級 水上三哩以上。 水中十間以上。
- 二級 水上五哩以上。 水中十五間以上。
- 四、名札ハ級ノ順序ニヨリ合宿所ニ掲グ。

第三章 游泳場規定

- 一、游泳場ニアリテハ必ズ師範及ビ助手ノ指揮ニ從フベシ。
- 二、成規ノ帽子及ビ水襪ヲ着用シテ練習スルモノトス。
- 三、游泳時間ヲ左ノ通り定ム。
- 午前 自九時至十一時。
- 午後 自二時至四時。
- 四、游泳時間中ハ疾病其他不得止事故アル場合ノ外ハ皆出席シ無斷ニテ游泳場ヲ去ルベカラズ。
- 五、規定ノ時間以外ニハ猥リニ游泳スベカラズ。
- 六、規定ノ游泳區域ヲ犯スベカラズ。
- 七、游泳時間ノ始メニハ脱衣場ニ集合スベシ。
- 八、出席簿ヲ作り勤怠ヲ調ブ。

第四章 和船使用法

一、和船使用時間ヲ左ノ通定△。

自午前六時、至午前九時。

自午前十一時、至午後二時。

自午後四時、至午後八時。

二、使用時間中ニ於テハ左ノ區域以外ニ漕出スルヲ禁ズ。

古茶屋、新茶屋、トノ間ノ幅十町ノ短形。

三、毎日最後ニ使用シタルモノハ脱衣場前ノ濱ニ引き上げ緊留シ、附屬品ハ一定ノ處ニ藏スベシ。

四、游泳時間中ハ一切和船ノ使用ヲ禁ズ。

第五章 雜則

一、水泳部ハ唐津ニ自炊制度ノ合宿所ヲ設ク。

二、毎週一回合宿所ニ全部集合シテ茶話會ヲ開ク。

三、臨時機ヲ定メテ游泳試驗並ニ遠泳五回、游泳三回ヲ行フ。

四、遠泳ノ回数ト距離ハ左ノ通りトス。

第一回―一哩。第二回―三哩。第三回―五哩。第四回―八哩。

第五回―十哩。

五、龍南會員以外ノ人ニシテ合宿所ニ合宿セシメ又ハ游泳場ニ入ラシメントスル時ハ必ず委員ノ認諾ヲ要ス。

注意

本年度水泳部ニ來會セントスル人ハ左ノ事項ヲ承合セラレタシ。

一、開會期間 自七月十五日至八月十日

二、場 所 肥前唐津虹ノ松原海水浴場。

部 報

三、下車驛 唐津驛

四、合宿所 唐津虹ノ松原海濱院內

一日三十五錢内外、合宿所ニ宿泊セントスルモノハ毛布又ハた

んぜん携帯ノ事、但貧布團アリ

六、唐津驛ヨリ二町ノ處ニ鐵道馬車アリ海濱院マデ距離一里半。馬

鐵賃片道十錢。

七、上略本ヨリ唐津驛ニ至ル汽車賃片道一圓四十九錢長崎ヨリモ殆

ト同額。福岡ヨリ一圓

八、合宿所タル海濱院及ビ附近ノ旅館ハ海水浴客ノタメニ設ケラレ

タルヲ以テ諸先生及ビ諸先輩ノ御投宿ニ適ス。吾等ハ爲メニ犬

馬ノ勞ナトルヲ辭セズ奮テ御來唐アラン事ヲ願フ

演說部

豫饒演說會記事

五月二十四日(土曜)、晩春の物靜かな宵暗の中を一夕の雄辯に俗腸を洗はうと志した人達は、三々五々縣廳通りなる物産館集議所へと道を急ぐ。

例年の慣習によつて卒業生豫饒の演說會が催されるのである。

一つには聴衆が思ふ様に集まらなかつたせいもあら

うか、兎に角正午後六時といふ觸出しが不感心にも辛と七時五十三分に至つて、永松委員の豫餞兼開會の辭となつて表はされた。吾人敢て小言を並べるといふ譯ではないが、せめて光榮ある龍南の天地に丈け位は時間をバンクチュアリーに守つて貰ひたい。次いで直に三年の螢雪を閲した意義ある辯士諸君の演説に移る。

第一席

黎明

一部甲 生駒 良介君

正八時辯士は拍手喝采の裡に壇上に上る。

劈頭君は近代的思潮の真相を喝破し、循々として十九世紀初期よりの歐洲思想の説明に入る。

前世紀は物質主義、懷疑主義より遂に個性の悲哀に陷つた。藻搖き足搔いて平安な水の表面に出やう出やうと努力しても、どうしても暗黒な陰鬱なあの恐ろしい海底に人の子を突き落さう突き落さうと慘酷な巨手を覆ひ冠せて居るのは「世紀末」の惱みではないか。要するに十九世紀は思想上に在いて、混沌紛糾定まらなかつた創世紀の昔である。自然主義隆盛の時代と云つてよい。しかも時代は今や一轉化せな

ければならぬ、肉より靈に、懷疑より憧憬に、物質より精神に生きなければならぬ、演者は進んでジェームス、オイツケン、ベルグソン、各者の主義主張を畧述し、白耳義(演者は佛蘭西と云はれたと思ふ)のエルハーレンの詩、「舟夫」を誦して奮闘主義の象徴を乙女の理想に托し、獨逸のハウプトマンの作「沈鐘」を拉し來つて、舊い鐘と新しい鐘との悲しい撞着を説かる。談はます／＼佳境に入らむとしたが、惜しい哉演者筋を失念して吾等は其の明快なる斷定を聞く能はずして壇を下られたのは遺憾であつた。何遍も繰返される通り、凡そ演説には、内容、言語、態度、の三は缺ぐべからざるものであらう。内容は頗る豊富であつた。白村氏の近代文學十講を繙けば直ぐ分る言語、態度の點に在いては今一息と思はれる節もあつた。「換言すれば」「然らば」「要するに」「然しながら」、のリフレインが少々耳障りに成らぬでもない。手をついても後ろに組合はせて置くのも萬全の策としてはどうか。要するに君は未知數である。「之で御無禮しまつせう」を繰返さないで、努力の誠を盡されたならば、

君が舌にわたいての開拓は期して待つべきものがあると思ふ。

第二席

生活上の象徴主義

三部 北村 直躬君

専制は屠るべし、自由は最後の勝利者なり、十九世紀の一文豪を引用して論に入る。

ゴーチエ、ニイチエより轉じて理想と現實との衝突にわたいて生ずる悲哀を説き、近代象徴主義、之を生活に應用せざるべからず、と突込まれる。

歸來笑撚梅花嗅、春在枝頭已十分、あの悲觀詩人レナウのアメリカより歸つた此境遇は、徒らに理想の幻影に趨つた憫れむき人の末路である。活動の源泉は凡て現實に存在する、生半可の中庸や、淺薄なる信仰は斷じていけない。スフィンクスの謎は吾人に撓まざる努力を訓へてゐるではないか。

現實を味はんが爲に現實を味ふのではない、未來に生きさんが爲に現實を味ふのだ、と結論して、拍手の裡に降壇。

二十四分の短い演説、吾人の啓發する處しかも多大なりであつた。あの底力のある大きな音響は、夫れ

丈けでも何となく努力の影を想はせられる。併しながら君平生の卓見に比して、今少し中心点を論破して貰ひたかつた、題目に對して今少しく評述されて欲しかつた。

第三席近世史上に現はれたる二大彗星

一部 甲 渡邊 喬君

十九世紀は同盟、協約、協商の全盛時代であつた。各國民は争うて各々其の好む所に適歸した。其中でも特に著しい神聖同盟といふ太陽系から孤立した勇ましい彗星がある。英國である。

最近英國の歩み來つた徑路を辿り、その彗星の光芒はもはや最大光度の時期を過去に求めるより仕方がない、と斷じ、論は第二の彗星たる米國に入る。

誠實のない外交は畢竟虚偽に過ぎない。支那に於ける領土保全と叫ぶも實は領土破壊である。桑の葉にたかつた蠶を背後から鶉目鷹目で監視して居るのは巨大な星章の紳士ではないか、我々は今回の排日問題を飽くまで日本の屈辱に終らせたくない、日本をして世界の舞臺に横行闊歩せしめよ、と結ぶ。

難かしい外交的關係を整然として説き來り説き去ら

れたのには感服した。併しながら、調語が少しく早過ぎて單調に失しはしなかつたか。演説の要は聴者をして明瞭に已が意を倦怠させる事なしに首肯せしむるにある。今一段の工夫がして欲しいと思ふ。

第四席

殖民戦争論

一部甲 本田 弘行君

大正の新春に在いて我等日本人は二個の著しい問題に遭遇した、政治的教訓に在いての憲政擁護、外交的教訓に在いての加州問題、是である。

今や我が國は太平洋の彼方北米の野に在いて、悲惨なる屈辱の汚名を蒙つて居る。三十五年前デニスケールネーに依つて唱道された「支那人逐はざるべからず」の獅々吼の叫びは一轉して我々日本人の頭上に咆哮せられつゝある。諸君は彼のブラックホール事件を記憶せりや、二十尺四方の牢獄の中に幾十幾百の生命が斷末魔の苦みに呻吟したりし凄慘事を知れりや。復讐は遂行されなければならぬ。我が國は果して此の確乎とした腰があるか。

凡そ近代は勞働、人種、殖民等の諸問題に其の衝突軋轢競争を見出す。日本は今や人口の過剰に國を舉

げて生活難といふ痛ましい文明の陰影に窘窮して居る。躊躇逡巡すべき閑々たる時期ではない。吾人は二十尺四方の様な此の小國內に蠶集して遂には窒息し下るか、又は決然起つてヤンキー傲慢の高い鼻をへし折るか、事は此の二途に出でぬ。

吾人日本國民は徒らに、春眠曉を覺わざる霞ヶ關の傀儡と、ホワイトハウスのプレジデントとの間の悠々たる折衝に、六千萬の生死を委託せらるべきものではない。只肉彈である、尊い肉彈である。我々は須らく十年間磨きに磨いた劍を按じて起たざるべからず、と火の如き熱辯を振つて彈丸の如き喝采場裡に悠然と壇を下る。

君の論鋒は徹頭徹尾開戦論であつた、其の眞摯なる態度、熱烈なる語調、時々急所を突くジエスチユアの妙に滿堂唯魅せられた感がある。望蜀には心持鼻にかゝる聲音を直して貰いたいものだ。好漢折角御自愛を祈る。

第五席

強兵乎富國乎

一部甲 渡邊 七五三君

悠々迫らざる態度で演壇に上るや、君は開口先づ筑

豊炭田にわたける懐しき桑梓の昔に變り果てた自然の頽廢を悲しみ、センチメンタルといふ巧妙な武器で敏くも聽衆を囚にする。あゝ昔の倂今いづこ。皆これ物質文明の庇蔭ではないか。

物質文明は自然的風致を損してまでも遂行しなければならぬ程貴い。顧みて我國の現狀は如何、公然と一等國で候と大きな顔がされるのか。今次勃發した北米移民事件など如何であるか、我等が血は徒らに湧く。金がないからである。

然らば我々は飽くまでも富國たるの策を採るべきであるか。將たまた貧乏強國の現實に甘んずべきか。富國もよろしい、強兵もよろしい。只精神の出發点が異なるのである。

古來その國庫に鉅萬の富を藏した國は、必ずしも常に光榮ある戰勝國ではなかつた。日本人は敢てローマを夢みる必要はない。フランスの繁榮を憧憬するには及ばない。寧ろスバルタの故計を學ぶべきではなからうか。

コップの水が一杯となれば餘つた水は外に溢れ出づる。當然の徑路である。我國の移民は正に正當の權

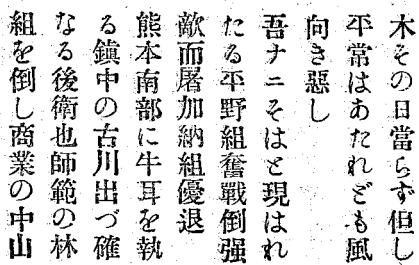
利を有して居るのではないか。三千年來の神洲の意氣は今や一碧眼奴輩の爲に汚されむとして居る。徒らに平和主義者の顰に倣ふべきの時ではない。

最後に壇を下るに當つて諸君に竊に警告して置きたい事がある。曰く、我國民は劍を手にして起たなければなるまい。

國民信仰の熱火に心燃ゆる時、堅く結ばれたる團結の絲の緩まぬ前、東郷大山此の世にある時、東洋の海に世界の大浪が寄せぬ前、吾等は劍を按じて起たなければなるまい。

前にも劣らぬ急霰の裡に最終の演者は深き感動を聽衆に残して去る。

龍頭蛇尾に終る世間滔々の辯舌に比べて、君は確に鮮明な長所を具備して居る。終りに到るに従つて、所謂油が乗り出し、豊富なる内容と共に兩々相俟つて此の成績を見るを得た。是を先の本田君に比較を求むれば、一は老練、一は進取、一は冷靜、一は熱烈、何れ劣らぬ花の若武者である。主觀的態度に於いては双方申分なし、歸納にあつては前者或は後者に一籌を輸するか。



四十三

味にてヴォーレーをやる才技見事也、佐藤年少にて昨年の高工對のマッチに上りて當らず部員皆當日上ることを期せり然るによく活動し行本のバスボールもよく拾ふ行本得意のスマツシングにストツブにウォーレーにて敵を攻め宮野對戰に違なくあはれ佐藤組をして名をなさしむ

高工、山口、北村對佐藤行本 山口は實に恐る可き後衛にしてロツブの正確なることブレーシングの美しきこと當日の白眉也、流石の行本もブレーシングされること數回佐藤よく廻りて却つて攻勢に出づ行本その間を利用して踏ねまはる北村當日不振動く度に佐藤抜き山口廻るに由なく遂に敗る、佐藤矢張り青い顔して笑つて退場。

大學、宮川、津田——守永、正林 宮川は昨年まで本校の御大なりき後衛と云ふ資格に於て間然する所なし然れども練習不足のため當日不振、津田は本校在學生なり宮川の前衛なき故に出馬すスマツシングとリシューヴが旨い、守永は鐵砲に帆かけ自動車に曳かせた様なバックの熱球を唯一の武器とす然し當日はそれをやらせるだ敵の拙くはなかつたそれと云ふ

程打つたのは一つもなし正林は長距離を利用して高いスマツシングを取るストツブもヴォーレーもやる事はやるけれども左程確實ならざれども當日は當つたのか當らないのかはからねども勝つことは勝つ、奇妙なボール許り打つて居た立花萩原は不戦組なり出場撰手一同寫眞を撮りて生徒集會場で茶話會を開き興を盡して五時散會せり

春の長日も金峯の彼方に没し武夫原の月見草のみ笑顔に咲けり數時間前のボールの轟、修羅の巷も唯虫の音のみ靜に聞えて居る思ひ出せば去年の十月の試合に英姿を見ることが出來た山川君も今は故人となつて居る自然の惡戯は慘酷を極む

當日の參觀者には當部に緣故の深い後藤醫學士が見られた、が當日使用したコーは氏の時代の遺作物だそうな、宮川氏は當日遙に福岡から出で下つて深く部員一同感謝致します尙部員一同が熱心に萬事萬端に注意して行動されたため肉体的にも精神的にも充實した會を催すことが出來たのを非常に感謝して置く

◎柔道部々報

◎五月十一日熊本縣立濟々疊にて開催の熊本學生演武會に於ける本部出演者成績左の如し

○(蔭) 原 康(五)
長 野 勇(濟)

○(江) 口 重(五)
別 府 二(濟)

×(田) 中 敏(三)(五)
赤 呈 治(濟)

○(井) 浦 彌(三)(五)
大 石 實(濟)

○(田) 中 敏(三)(五)
勝 屋 英 雄(鎮)

○(山) 内 龜 三(五)
八 木 正 一(醫)

◎五月十四日午後三時より濟美館に於て豫餞大會を催す

◎五月二十八日紀念撮影をなす

○豫餞大會記事

龍南の畔綠重く滴水を落さば色融けんばかりなる五月十四日濟美館内に我柔道部豫餞大會を催す。時既に初夏人稍もすれば柔情に流るゝに此壯舉起るや濟美館裏は柔道部健兒の剛氣に燃ゆ立てり、白壁部長由比教頭モール師臨席光づ村上二段吉武初段の投げの形があつて後中野二段神江師の審判の下に紅白勝負に移る。先鋒は紅、進藤。白兒島。孰れも負けず

劣らずの剛の者、互に流汗數珠の様になりて奮闘數分に渡りしが、遂に進藤の大外刈は見ん事敵の虚を突いて勝聲先づ紅に湧く。兒島を初陣の血祭にしたる進藤は無念に急る柳原に戦を排みぬ。雲を起し風を捲いて龍虎の如く相闘ふこと數刻終に引分かれたり。次で出でたるは石川に三戸共に巨體にして悠々如たり、三戸が火手の勇も空しく石川が足拂ひに刀折れて敢無き最後を遂げ。續く松田は小兵にして慄悍よく立廻り、味方の仇を報じぬ。次なる紅は宮井、敵を睥睨して凜然松田に立ち向ふ、如何ぞ鐵石にあらざる身の脆くも松田は袈裟固に破らる。宮井勢に乘じ駒を早めて福場に突貫せしが敵の巧妙なる返し業に落馬して再び立つ能はず。紅軍慨然として立ちたるは今中なり。堂々六尺の体軀、彼が得意の槍先は福場を大腰に斃じ土岐に肉薄せり、彼又今中に劣らぬ巨體、流石勝ち誇れば今中も絞に一本を取らる。土岐に奮進する者を誰とかなす。許斐其人にあらずや。彼小軀なりと雖も何んぞ弄せられん攻守盛んにして兩虎立たず引分となる。次に紅軍椎木と白軍の中村との活劇。互に胸を的に戦ひしが、椎木の虚中

村の突くところとなりて、跳腰に勝負定む、戦友の仇討はやと満面朱を注げる中島。此所を先途とあらゆる業を出し戦ひたりしが中村の泰然たる軍容に戦場の露と消えたり。中村は新進氣鋭の大庭と奮闘す奮闘終に心ばかりははやれども疲れたる身の如何せん無念残念の中に涙を吞んで退きぬ。納富之れを見て怒氣心頭に現はれ雨の如く切り立てて遂ひに綾に敵手を退かしめしが紅軍の精銳三田の飛鳥の早業を防がん術もなく大腰に辱を取れり。白軍の一方より物見せて呉れんと飛び出し駒井は力山抜く萬夫不當の剛者、三田は彼れの敵にあらず續く松永神出鬼沒能く死力を盡せしが孺子をして名をなさしむ。時に奮然として陣頭に現はれしは井上老鍊の強者なり。壯士撫劍の雄風は四隣を拂ひ、銳鋒赴くところ其れ何んの楯がよく防ぎ得ん。得意の背負投は忽ちにして一番鎗の功を奏しぬ。戦友の非運を吊はんとて、好敵に向ひたる野田も、英雄の末路と消えて井上の業いよ／＼汗を渡たり。既に二人を破つて紅軍意氣大いに上がる。時に無念の一聲は白軍の間に起りぬ。決然として白軍の勇士荒巻は大音聲名告を揚げて陣

頭に表はれ互に武名を残さんと激しき血戦眞に兩虎深山に戦ひて風を起すの状を見せたり。勝利は荒巻に歸しぬ。徳永太刀風凄じく切込みしが切先誤り却つて敵に抑へ込まる。紅軍に其人ありと知られたる業の名手蔭原、陣頭に勇ましく進み出でぬ。彼が一氣呵勢然も一絲不乱の業、前にあるよと見れば忽然後に現はれ一撃の下荒巻を破つて少からず白軍の心膽を寒からしむ。白軍よりは八尋静々と進み出づ。中肉の好武人、然してよく妙技を弄す、互に電光石火花を散らし奮戦寸時、八尋痛手を受けて共に引き分る。敵も味方も惜しき事してけりと悔めども既に及ばず。花々しき決戦を見る能はざりし事重ね重ねも惜むべきなり。顧るに、後陣、紅軍五騎。白軍五騎。兩軍成敗の機は刻々に迫れり。新手の武者は井浦に江口、龍虎の争なり。然れども井浦の單刀直入は江口の沈勇に優り居りしか、腑甲斐なくも江口は首落され終はんぬ。白軍の寶珠山は悠々と戦線に馬首を向けぬ。彼が當るを幸ひ薙ぎたて刈りたつ血刀の下、井浦は防戦苦闘力盡きて大外刈の合業に起つ能はず。寶珠山は更に田中と激戦を交へしが遂ひ

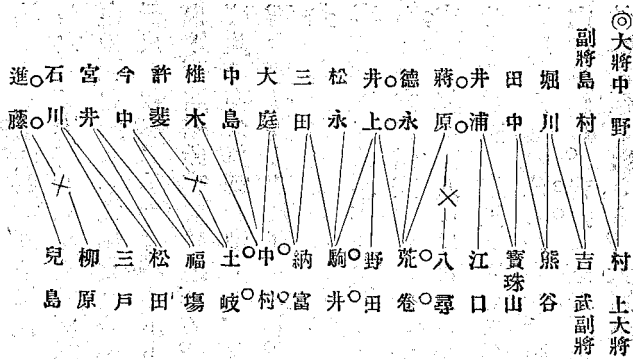
に彼が駒の蹄に踏み躪られたり。時なる哉白軍の三將初段熊谷は負けじ魂強くたゞくもうつも一歩も退かぬきかん氣の猛將、已れ小癩な田中奴とむづと組みて振り廻す。田中もさるもの互に奮闘力戰武運拙なくも田中四方固めに破らる。茲に於いて滿身燃に立ちて焚噲も只ならぬ紅軍三將堀川と熊谷は互に血の雨を降らし電光をきらめかし接戰せしが堀川の三尺の秋水、美事熊谷を屠り刀の錆を拭ひもあへず白軍副將初段吉武に迫れり。實に肢に鶴翼の法あれば此に亦た魚鱗の備あり、互に打ち振る太刀は電光石火阿修羅の荒れ狂ふ如し。時に吉武が切り込む切先稻妻の如く眞額に落し來りしたため、あはれ堀川が事は終りぬ。白軍副將初段島村は堂々として立ちぬ。あゝ一方に信玄あれば必らず他に謙信あり。島村と吉武。眞に其人にはあざるか。副將と副將互に自重せり。自重に自重を重ねて争ひ出でぬ。それ盛者必衰驕れるもの久しからず。平氏を亡ぼして源氏も亦亡ぼされぬ。吉武も遂ひに島村が名刀一振り無慘唐竹割に薙き斃さる。大將然り白軍の大將二段村上はやほら巨体を起して島村に向ふ、味方の非運に憤り

奮然として必勝を思ふ多年練磨を秋水に脂せしむるは今日を描いて他にある可からず。あゝ島村村上を破らんか、將た村上彼に勝たんか、島村つとめたり、彼は荒れたり。されど一人を切りて疲れたるを遂ひに大外刈にて敗北すいでや今日の勝負を決すべきの秋は來りぬ。紅軍大將二段中野は立ちぬ。紅勝つも白勝つも此一瞬の中にかゝれり。

“The fate of victory or defeat depends upon
This moment”

風死して肅たり。滿座襟を正し寂然として聲なし。中野、村上これ年來覇を争ひ、互に譲らざるの好敵手今も亦中原の鹿を競ひ追ふ。心中各決する處ありて必死を分とす。或は萬丈の波濤巨巖に激する如く、或は猛獅沙漠に月を戴いて吼ゆる如く、蛟龍姿をひそめ萬嶺屏息す。泰然たる中野の軍容凜乎たる村上の武者振り相待つて今日の見物なり。雲の歩みは益々早くして、風の叫びはいよゝゝ凄まじからんとす。陣營の中に星霜を閱する幾春秋、中原の鹿遂ひに未だ得べからず。今や血戰幾何の時を経て、水刀は秋夜腰に泣き、蒼龍は天を仰いで雲を待つ。紅將中野

紅軍 白軍



(表中名ノ右側ニ丸ヲ附セシハ、當日、優勝者ナリ)

西山に春いて、龍南の畔夕靄の中に黄昏湧きて健兒の意氣は天を衝く當時の結果は左の如し (二委員)

の意氣昂々として眉宇にあふる。既に以て敵を呑むに足る。宜なる哉凱歌は忽ち紅軍にあがりぬ。白將村上は送襟のために敗を取りしにあらすや。萬事休す白軍は破れたる。白軍負けたりと雖能く戦へり。本日の勝負は彼我共に力あり。面白かりき。勝負終りて賞品授與をなし進級者の發表あり部員一同茶菓を喫し午後五時半開散す時に夕陽

右終つて左の進級ありたり

- 奥野 正一 八幡屋春太郎 大塚 赫夫
- 山内 龜三郎 田中 敏三
- 右三級乙ニ進級ス以上

弓術部報

春季大會 (五月十七日)

チブス事件は習學寮の閉鎖となり爲に我部員に練習の不足と不熱心家の多數を生じ當日に於ける出席數も成績も更に振はざりき。來會者總數二十六名競射は六寸的十射にして入賞者如左

- 一等 吉水君(來) 二等 小倉君(高工) 三等 富田島君
- 四等 谷川君 五等 宇野師範 六等 横山君(高工)
- 七等 小笠原先生(來) 八等 鶴君 九等 佐々木君(鎮中)
- 十等 川淵君(高工)

本學期進級者如左

- 進五級 六級 鶴作次
- 進六級 許斐氏名、和田勤一郎、山田復一、荒川常太郎、兒島高俊
- 飯田六造、野中嗣雄、早川淡二、前田惟春、東陽進翁、田中弘吉、高島勇、中島壽夫、楠正人、古川俊勝、三田泰三、大村節次郎、佐藤重臣、島進人、野口久吉、内村廉次